13．新大陸発見第二説

ポルトガルは 1490 年以前にアメリカ大陸を発見していたが、ライバル国スペインに交易権を奪われないようにするため、アメリカ大陸発見を国家機密にしていたのだという主張です。1488 年ポルトガル人のバルトロメウ・ディアスがアフリカ南端を回ってインド洋に達したのです。これは嵐に巻き込まれ 13 日間漂流し、静になってから気付くと右舷に見えるはずの大陸が左舷に見えることを発見したことによります。即ち気付かないうちにアフリカ南端を回っていたのです。このまま進めばインドに到着できると確信したのですが、他の乗組員は嵐の恐怖におののき引き返すことを強く主張し反乱を起こしたのです。やむなく引き返すことにしましたがディアスは悔しさに号泣したと伝えられています。

アフリカ南端の岬を「嵐の岬」と名付けましたが、後にインド航路が確立するとポルトガル国王の命により「希望峰」（Cape of Good Hope）としました。何故か日本語訳は「喜望峰」です。もう一つ船乗りの知識を振りかざすとアフリカの最南端はアガラス岬です

続いてポルトガルの探検家・航海士のヴァスコダ・ガマがインドに到達して大航海時代の先駆者となり最重要人物になりましたが、実はアフリカ東岸でインド人のパイロットを雇ってアラビア海を横断し 1498 年 5 月インド、ケララ州にあるカリカットに到着しておりますが、交易はうまくいきませんでした。それはヨーロッパとインドとの経済格差、技術格差があまりにも大きかったことによります。この時代ヨーロッパと比較するとイスラム社会やインドを中心とする南アジアの方が遙かに進んでいたのです。ガマが積んできたポルトガル製の商品は全く相手にされず、乗組員全員の所持金を合わせて購入した香辛料を持ち帰り高価に売れたとのことです

このようにして大航海時代は始まるのですが、その先駆者はポルトガルと隣国スペインで、双方とも覇権を狙って対立していましたから、ポルトガルはアメリカ大陸新発見を国家機密とし、一挙に東西航路独占を企んでいたのかもしれません。

1494 年ポルトガル・スペイン両国はトリデンシャル条約を結び、世界を東西に二分して支配しようとし、ローマ教皇アレクサンデル六世が教皇勅書を与えて公認するという暴挙で、その後の世界が植民地帝国主義に陥る原因を作っています。この話は別の項でしましょう。